思い出の大学入試

写真は毎日新聞 2 月 25 日夕刊に掲載された名古屋大学の入試風景である。豊田講堂にはノーベル賞受賞の垂幕が掲げられている。その影響か工学部の倍率が高いようだ。

毎年繰り広げられる入試風景だが、わが身を振り返えると懐かしくなる。今から半世紀近く前、岐阜県立郡上高校の時代だ。国公立大学しか受験させてもらえず、まず受験日が早かった横浜市大を受けたが、倍率もかなり高く不合格。この時に初めて、緊張して東海道新幹線に乗ったことだけは鮮明に覚えている。

国立大学は当時、1 期と 2 期に区分されていた。1 期は金沢大学を受験した。私の学力では「難関校」であったが、思い切って法文学部を受験した。ここで忘れられないのが、同じクラスの女子と一緒に金沢まで行ったことだ。受験のことなど忘れ、浮き浮き気分で凍てつく金沢に行き、私だけ不合格となった。このショックは大きかった。

2 期は信州大学人文学部を受験。金沢大学と同じく、苦手の数学・理科の配点などによる。「金沢ショック」と風邪を引いての受験。もうろうとしながら答案に向かったが、それが幸いしたのか、無事に合格できた。この時の感激は今でも忘れられない。「ああ青春の歓喜より」である。郡上高校から国公立大学に進学するのは数名であり、理系が苦手な私が合格できたのは、「大まぐれ」だった。偶然ながらも信州大学に入学でき、今から考えても本当に良かったと思う。

レポートでも書いたように、大学院入試も「失敗」を乗り越え、なんとか合格できた。苦難の院生生活を経て、大学教員としての道を歩んで、無事に卒業（定年退職）できた。今度は教員として入試に関わることになる。とりわけ名古屋市立女子短大（市短）時代の入試は、いつも「キンチョウの春」であった。

私が就職した頃はまだ「短大志向」も続いており、かなりの受験生であった。市短のキャンパスでは入試ができないので、南山大学などをお借りして実施した。就職後まもなく入試関係の役職につき、前日から会場設営などを行った。試験当日も朝早くから、監督などに従事した。教職員の人数も少ないので、入試は「総動員体制」で実施された。大きな大学のように、ローテーションを組める状況でなかった。当時は入試業務もまだ電子化されておらず、集計などは手作業であり、ずいぶんと時間がかかった。こうした手作業の「プロ」のような先輩がおり、そのスピードに感心したものである。

入試の時期になると、ふと遠い昔のことが懐かしく思い起こされる。

(2015 年 3 月 1 日)